

	<h1 style="color: blue;">イランと石油と私</h1> <h2 style="color: blue;">SCE・Net 加藤 恒一</h2>	<p>E-117</p> <p>発行日 2020.2.8</p>
---	--	--------------------------------------

パリからの飛行機はだいぶ遅れて、深夜にテヘラン空港に着いた。真冬の街をタクシーで移動し、ヒルトンホテルにチェックインした。旅の疲れからぐっすりと寝た。翌朝カーテンを開けると、白雪を被った山々の連なり、まさに lots of Mt. Fuji という景観が飛び込んで来た。

1976年12月末、ヨーロッパでの業務の帰途、米国留学時に親しくなった K 氏を尋ねた。イランへの初めての旅である。まだパーレビ国王の時代であり、テヘランはヨーロッパと同様に、華やかで賑わっていた。

K 氏は小生と同年でテヘラン工科大学を卒業、数年働いた後、MITに留学した。オフィスで机を並べ、毎日のように夕食を共にした友人である。当時はイランと米国の蜜月時代であり、大勢のイラン人留学生をキャンパスで見かけた。特に原子力工学専攻の院生が多かったように思う。K 氏は修士課程修了後現地のコンサルティング会社に勤めており羽振りが良かった。まだ独身でありガールフレンドも多かった。K 氏と友人の案内により、2 日程テヘラン市内とその周辺を観光して大晦日に帰国した。

その後イラン革命（1978）、イランアメリカ大使館事件（1979）、イランイラク戦争（1980-1988）などが起きたが、イランと日本の関係は正常であり、K 氏は数年毎に来日し、交友関係は続いた。



イランの石油地図 製油所 ●

年毎に来日し、交友関係は続いた。

1989年秋、日本鉱業(株)にて重質油分解プロセスの開発に携わっていた私はイランの多数の製油所を訪問する機会を得た。当時イランに食い込んでいた T 商社から、NIOC（イラン国営石油公社）に対する技術販売を目的とした技術説明を依頼された。一般に中東イラン産原油はイラニアンヘビーに代表されるように高硫黄分、高金属分を含むものが多い。

その中でフローザン原油は、コストパフォーマンスが比較的良好で、T 商社経由で日本鉱業はかなり多量を輸入し処理していた。イランには当時 7 つの製油所があったが、2 次装置の設置率が低く、製品の品質も悪かった。産油国であるイランはガソリンを輸入していた。NIOC には設備改良増強の計画があり、我々は協力する立場にあった。

ヒルトンホテルはエステグラル（勝利）ホテルと名前が変わり、正面エントランスの床面には米国の星条旗が敷いてある。女性の服装は全てイスラム式に変わり、街を行く人々の表情は憂鬱げに見えた。

約 2 週間をかけて、イラン北西部のテヘラン製油所(225,000B/D)、タブリーズ製油所(115,000B/D)、イスファハン製油所(266,000B/D)、シラーズ製油所(40,000B/D)を訪問した。戦争の直後であり、各製油所は疲弊していた。テヘラン製油所では戦争で片腕を失った製造部長が印象に残っている。イラク国境に近いタブリーズ製油所の集会室には大勢の写真が飾ってある。イランイラク戦争の犠牲者達である。計器室はコンクリートで覆われ要塞のようであった。イスファハンは短時間の滞在であったが、京都のように美しい古都であった。

テヘラン市以南は砂漠地帯であるが、前述の南側の山地を超えるとカスピ海縁側に達し、景色は一変して緑の多い別世界となる。パーレビ時代に繁栄したレストランや別荘の廃屋が多数残っていた。

業務の合間を利用してアドレスのみを頼りにテヘラン市内の K 氏の住居を探し尋ねた。メールはまだなく、電話もなぜか使えなかった。ペルシャ語の判る T 商社社員の助けを借りてかなり探した後、道端で話しかけた老婦人が偶然にも K 氏の母上であった。K 氏はやっと結婚され娘さんが 2 人居た。K 氏は革命後収入が大きく減ってしまったと言う。以前の社会が良かったと繰り返していた。

帰国後テヘラン製油所に分解装置と 2 次装置を設置する提案を行い検討したが、政府援助を絡めたファイナンスが上手く行かず立ち消えとなった。停滞していた IJPC プロジェクトの影響もあったかと思う。

1999 年 6 月、産油国のエンジニアを対象とした JCCP（国際石油交流センター）の Lecturer として、テヘランとイスファハン製油所を再度訪問する機会を得た。この際には大掛かりな提案は行わず、技術交流の目的で省エネルギー、水素化脱硫と環境対策についての講演と意見交換を実施した。

エステグラルホテルの近所にイラン唯一のゴルフ場があった。当初は 18 ホールあったようだが、徐々に撤収されており 13 ホールに減っていた。景色のよいゴルフ場ではあったがフェアウェイの一部は畑と同様、整備は全くされていなかった。



テヘラン製油所にて 1999年6月



テヘラン市内のゴルフ場

2002年4月製油所及び製油施設改造計画（品質向上と環境対策）のため、S商社と再度NIOCを訪問した。テヘラン市内の大気汚染はひどくなっていた。ガソリンと軽油中の硫黄分は先進国のそれと桁違いに高く、有鉛ガソリンが未だ使用されていた。4エチル鉛が禁止されたのは2003年以降である。



K氏家族 1999年6月



K氏親族 2002年4月

イランの原油生産は一時2,000,000B/D台に低迷したが、ここ数年は3,500,000-4,000,000B/Dにて推移している。輸出先は米国の制裁の要請を受けてヨーロッパは大きく減っている。元々アジア地区への輸出は多かった。日本への輸出量は150,000B/D程度、日本の消費量の5%弱に相当する。日本にとって大事な輸入国の一つであろう。

イランイラク戦争において、米国はイラクを応援し、戦争終結後、ブッシュ大統領はイラクのフセイン政権を倒した。同様のケースは繰り返されている。中東の国々は米国の都合に翻弄され続けていると思う。トランプ大統領の出現によりさらに厳しくなってきた。

イランが友好のあかしとして、1973年に米国にプレゼントした **Iran Festival** は記憶に残っている。1970年台初めの原子力工学専攻の学生の多くはイランに帰り、原子力技術・政策にて中枢を占めたと聞いている。そのイランとアメリカが現在激しく対立している。皮肉なことである。

K氏の2人の娘さんは成人し、それぞれ弁護士と医師になったと聞いている。いつの日か、またイランを訪れて見たいと思う。

以上